
頭上に注意

三代渡吉

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

頭上に注意

【Nコード】

N5834E

【作者名】

三代渡吉

【あらすじ】

本当に危ないですから、標識があつたら注意しましょうね。

カラス

『頭上のカラスに注意』

ボトツ。

標識に気づいた時には既に遅し、男の頭には白い糞が落とされていた。

カーカー。

カラスが嬉しそうに鳴いている。

短気で有名だった男は、顔を真っ赤にしてカラスを追い始めた。

カーカー。

また男をバカにするようにして、カラスは鳴いた。

ただでさえ腹を立てている彼の頭は爆発した。

男は、丁度道端で出会ったテロリストから手榴弾をひったくって、カラスに投げつけた。

カーカー。

しかしカラスは、そんな男の動きを読んでいたように避けた。外れた爆弾は、公園のゴミ箱にすっぽり入って、爆発した。

子ども達の歓声が、悲鳴へと変わる。

カーカー。

チクシヨウ、どこまで俺をバカにするつもりだ！ と男はカンカんだ。

カーカー。

よせばいいのに、カラスは鳴くのをやめなかった。

腹が立った男は、なんとかして捕まえてやろうと、丁度止まっていた居酒屋タクシーを奪いとって、車で追い始めた。

これが本当のカーチェイスである。

カラスは早かった。車なんかより早かった。

男は、もう法定速度など無視して走ることにした。タクシーに一つに、乗用車、バス、トラック、バイクが次々に飛ばれていく。パトカーも、居酒屋タクシーの前では何もすることが出来なかった。

壮大なカーチェイスは、どこまでも続いた。

何回もガソリンを補給しつつ、「くそっ、原油高め」と値段の高さに腹を立てつつも、男はカラスを追った。

カラスも、この男の相手をしているのが楽しいのか、ガソリンを補給するのに一々待ってあげたり、彼がコンビ二に立ち寄っても、屋根の上で舞っていたりした。

その度に男は怒り狂った。そして、何回も何回もカーチェイスは繰り返された。

カーチェイスは、ついに最北限の礼文島まで辿りついていった。もうこれ以上行くことは出来ない。男は疲れてガックリと項垂れた。

力が抜けたところで、そういえばトイレに行っていないことに気づいて、せっかくだからとばかりに、最北限のトイレで用を足すことにした。

『最北限のトイレ』とデカデカと書かれたトイレに、彼は少しウキウキしながら入ろうとした。

ポトツ。

「デメエエエエエエツ！」

カーカー。

カーチェイスは再開された。

今度の行き先は、沖縄のようだ。

パンダ

『頭上のパンダに注意』

何のことだかわからなかったが、とりあえず僕は頭上を見上げてみた。

ドスッ。

僕は、大柄なパンダに踏み潰されていた。

イタタタタ。骨折れたかな、と思ったけれど、どうやら腰を打撲しただけで、骨自体はなんとか大丈夫だった。

しかし、ここは日本だっていうのに、どうしてパンダが降ってくるのか。

「よう。ごめんな」

パンダが喋った。

「なんなんだよお前」

「ちよつと中国から逃げてきた」

にしてはどうして日本語ペラペラなんだよと突っ込みたくなってきたが、そこは我慢する。

「ところで俺、家がないんだよ。飼ってくれないか？」

「なんでだよ、僕は珍しいパンダしか飼わないぞ、カンフーパンダとか、テンプシーパンダとか」

僕は無理難題を言ってみた。

「俺、ブシドーパンダ」

「よし、お前飼うわ」

即決した。そんな珍しいパンダだ、一緒に暮らしていたらさぞ楽しいことだろう。

ボロアパートだったが、笹の葉があれば良いとパンダは結構気に入ってくれた。

三日後、国から電話があった。

なんでも、上野動物園にパンダをまた置きたいから、貸して欲しいということらしい。

今中国は大変で、パンダが借りられなくなったから、是非とも協力したいということだった。

僕は、タダで渡すのもなんか嫌だったので、無理難題をふっけた。

「貸し賃、一週間で一億でどうでしょう」

「むむむ……仕方ないですね」

えっ、いいの？

こうしてブシドーパンダは、上野動物園に引き取られていった。

朝は子どもの相手、夜はキャバクラで女をはべらせて、悠々自適の生活を送っているらしい。

「……お前って、ブシドーパンダじゃなくて、フシダラパンダじゃないか」

一文字しかあってねえ。

そんなこといいつつ、今日も僕はパンダの飲み会に付き合うのであった。

今日は、百万円以上する高級ワインでも持って行ってあげよう。

（後書き）

動物ばかりになってしまった。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5834e/>

頭上に注意

2010年10月16日00時29分発行